

オリンピックと 女性の活躍

スポーツに関わる女性の現状と取り組み

東京2020大会では
女子選手が過去最多に

第1回近代オリンピックは女人禁制の大会で、女子選手の参加が認められたのは、第2回パリ大会からでした。とはいえ選手997人中、女性は22人でテニスとゴルフの2種目のみ。それ以降、女性の競技数は少しずつ増えましたが【表1】参照）、IOC(国際オリンピック委員会)に「女性らしい」とみなされた競技だけが女子正式種目として認められています。しかし1988年ソウル大会で格

闘技である女子柔道とテコンドーが公開競技※1)になった頃から女性の競技数が増加。2012年ロンドン大会でボクシングが女子正式種目に加わり、全競技で女性の参加が可能になりました。同時に、全参加国・地域から女子選手が派遣された記念すべき大会となったのです。冬季大会では、2002年ソルトレークシティー大会で初めて全競技で女性の参加が可能になりました。日本では、1912年ストックホルム大会で陸上競技の男子選手2名が派遣されたのが始まり。女子選手は、1928年アムステルダム大会の陸上競技・女子800メー

【表1】近代オリンピック夏季大会の男女競技数の変遷(混合含)

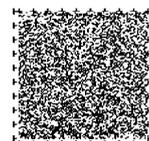
回	開催年	オリンピック開催地	女子	男子	混合
1	1896年	アテネ(女人禁制)	0	8	0
2	1900年	パリ(初めて女性参加)	1	13	0
5	1912年	ストックホルム	2	14	0
9	1928年	アムステルダム	4	13	1
18	1964年	東京	6	17	2
21	1976年	モントリオール	10	19	2
24	1988年	ソウル	15	21	3
25	1992年	バルセロナ	18	24	1
30	2012年	ロンドン	26	26	3

資料：男女共同参画局「男女共同参画白書平成16年版」「男女共同参画白書平成30年版」から作成

スポーツ界で活躍する女性が増えています。しかし、選手を支えるコーチやスポーツドクター、トレーナーなどのスタッフは、大半が男性。オリンピックにおいても、選手の男女比はほぼ同じなのに、女性コーチは11〜12%程度(スポーツ庁の資料より)。資格を持った女性スポーツドクターは7%しかいません【表2】参照。例えば練習メニューを作成するとき、女性のコーチやトレーナーであれば、身体的特徴による女性

選手を支える
現場の女性たち

トルに人見絹枝選手が初参加し、銀メダルを獲得しました。オリンピックに出場する全選手に占める女子選手の割合も増え続けていて、2020年東京大会では過去最高の48.8%となる見通し(IOC発表)。20年程前から、日本の女子選手の割合は、世界の割合より高く、ほぼ半数で推移しています。



(※1)公開競技とは、オリンピックの開催地で根付いていたり、次期正式競技候補をオリンピック競技として実験的に実施するもの。